

フィリピン地滑り災害復興支援事業に派遣されて

国際医療救援部 主事 宮脇貴子

派遣地域:フィリピン、レイテ島

派遣期間:2006年10月~2007年4月

昨年10月より半年間、フィリピンの「地滑り災害復興支援事業」の事業管理要員として派遣されました。今回、その内容をお伝えしたいと思います。

地滑り災害とは、2006年2月17日、フィリピン中部に位置するレイテ島南部のギンサウゴン村で発生しました。この災害により、死者154名、行方不明者972名、泥に埋もれた家屋281棟及び小学校1校という甚大な被害が生じました。ギンサウゴン村では、村人のおよそ4分の3が亡くなりました。

ギンサウゴン村のジョセフィン・サンソルさん(38)は、夫と子ども2人、家族は全て地滑りで亡くしました。

「あの日、私は銀行に行くためにギンサウゴン村を出ていました。そして、家族を全て失い、私一人が生き残りました。自宅の跡はなく、かろうじて娘の写真と聖人像だけを探し出すことができました。3ヶ月間は毎日つらくて、家族を思い出しては泣いてばかりいました。そのとき、フィリピン赤十字のローズさんが、心のケアのワークショップを開いてくれ、私はようやく立ち直るきっかけをもらいました。ローズさんは、その後も私の様子を気遣ってくれていて、本当に感謝しています。以前、サリサリ・ストアを営んでいたのので、できればまたサリサリ・ストアを再開したいと思っています。支援によって建てられた住居には昨年の11月に入居しました。それまでの避難所はとても暑くて、病気がちになっていました。生活はまるで豚のようで。住居はできましたが、まだ電気もガスも、水道もありません。明日はなくなった息子の誕生日です。アイスクリーム売りだった夫も大好きだったアイスクリームを、明日は買って友達と食べようと思います。」

日本赤十字社が国民の皆様に支援を呼びかけたところ、総額2億円にのぼる寄付金が寄託されました。その支援を形にする担当として、今回私がフィリピンへ派遣されました。被災者、被災地域の人々にとって必要な支援を、限られた資金の中で、赤十字のポリシーに則った形で計画を立てる。そしてそれが形になるように、運営体制を整え、事業を監督する、という役割でした。

その事業内容は主に、再定住地での建設事業と、近隣医療施設への医療資材の提供です。再定住とは、この災害によって家を失ったギンサウゴン村の住民のみならず、その周囲の村7村でもいつ地滑りが起きても不思議ではないため、総勢1000世帯近くが住

み慣れた家を離れ、再定住することが国により定められています。

私が事業計画を策定する際、再定住を余儀なくされている人々のための住宅建設は既にドナー（提供者）が決まっていたため、日赤の支援では主に新しい再定住地における公共施設、特に小学校の建築と保健施設、保育施設を提供することとなりました。また、青少年のレクリエーション施設として、バスケットボール・コートを整備することや、近隣の医療施設における保健サービスの向上のため、医療資材の提供と病院修繕が計画されました。

では、どのように事業を形にするかといいますと、まず基本となる「契約」を完成させます。今回は二カ国間支援事業のため、フィリピン赤十字社と、日本赤十字社との契約となり、それは通常「事業協定書」と呼ばれ、基本的な合意事項を確認します。私はこの協定書作成から取り組む必要がありました。

協定書が結ばれるよう両社の調整を進める中、事業運営体制を整える必要がありました。プロジェクト・チームをどうするか、だれを選定するか、何人採用するのか。フィリピン赤十字社では、どのような体制が一番効果的かを見極めながら策定します。もちろん、各人がどういった仕事をするのかの内容を定める職務内容も整える必要がありません。

今回は建築事業が中心事業であったため、建築コンサルタントを選定する必要がありました。建築のことなど全く素人の私でしたが、今回の事業を通じて業者選定のための入札、建築業者を選定するための入札を監督するため、建築関係の勉強が必要でした。

実際、半年間の派遣期間は事業を進めるための「土台作り」の期間でした。結局、契約書を5つばかり確認する必要があり、皆さんが想像するような「被災現場での救助」というよりは、デスクワークが中心です。人事課、総務課、会計課、施設課、物品管理課の仕事を同時に監督していた、といったところです。そのため、被災現場であるレイテ島と、フィリピン赤十字社本社のあるマニラを行き来する生活が続きました。

派遣期間中、一番感動した瞬間というのは、実はアナハワン病院の院長先生と話をしたときです。それは、ようやく病院改築のスタートの目途がつき、エンジニアを伴って測量のため訪問したときのことでした。カホイ院長先生は、大きく目を開いて「本当に来てくれた！」と両手で握手してきました。というのは、地滑り災害後、多くの援助機関が病院を訪問し、「何が必要か、何が困っているのか」といった質問をしてきたが、どの援助機関も実際に修理をしようとエンジニアと来たことはなかった。赤十字がはじ

めて、約束どおりエンジニアと来てくれた、とって感動してくれました。

私としては、日本赤十字社として有言実行はあたりまえ、ただ開始するまで少し時間がかかります、ということ伝えていたつもりですが、フィリピンでは形になるまで信用しないことが当たり前の社会。その違いを改めて実感しました。

今回の派遣の主な内容は、復興期における支援事業の運営管理だったのですが、たまたま期間中、フィリピンのルソン島を通過した台風 21 号による被害が甚大であったため、緊急救援時の対応を行うこととなりました。

突然の災害に遭ったマヨン火山周辺地域の人々は、台風によって増加した雨量により川が増水し、火山灰が土石流となり、多くの人と家屋が流されました。そのため、305 の避難所に 8,905 世帯が避難し、この台風の被害を受けた人々は 65 万人に登りました。

フィリピン赤十字社は、主に 4 つの分野（救護所、被災状況調査 5 班、救援チーム、安否調査と心のケア）で活動を行い、私は被災状況調査や、NHK などの報道機関への連絡などを担当することになりました。またフィリピンのキリノ州に派遣されていた保健要員を現場に呼び、救護所で活動できるようにコーディネートするなど、普段とは違う対応を行う必要がありました。

これまでは、災害の落ち着いた復興期での活動が主であったため、災害直後の現場に入り、調査や関係機関との調整を行うことは初めてで、一時は「基礎保健 ERU が日赤から発動されるかもしれない」という状況。大変緊張しました。現地入りした私は当初、フィリピン赤十字社のボランティアと共にテントで寝泊りすることになりました。昼間は快晴だった天気、夜は一気に冷え込み、かつ雨が降りはじめました。テントが雨漏りし、寝ている体がじっと雨に濡れていく。緊急救援の大変さが身にしみた時でした。

避難所を回ると、時には屋根の壊れた施設もあります。昨夜の雨は、どうしていたのだろうか、と本当に避難生活の大変さを想像しました。

結局、台風被害への救援事業は国際赤十字への支援という形で収まり、1 週間の現地滞在后、私はマニラに戻り通常業務に戻りました。

今回の派遣は、緊急救援時のコーディネーションと、復興期の事業立ち上げという 2 つの役割を知る機会となりました。快く送り出していただいた病院の皆様と、派遣期間中にサポートしていただいた本社国際部の方、また口論をしながらも、共に事業を完成させるべく働いたフィリピン赤十字社のスタッフの皆さんに、心から感謝しています。



写真1：現在の地滑り跡地の様子。1年たち、バナナの木が生えはじめている。



写真2：ギンサウゴン村のジョセフィン・サンソルさん（38）は、夫と子ども2人、家族は全て地滑りで亡くす。



写真3： フィリピン赤十字社のプロジェクト・スタッフと共に



写真4： 国際赤十字の支援によって建設された再定住地の住宅



写真5：建築事業の入札を開催。事前審査を通過した3社が参加する。



写真6：救護所で働く看護師



写真7：マンゴーなどのフルーツの売られている市場



写真8：台風による泥流被害にあったマヨン火山近隣地域